

# セン ター ぶしん

NO.95



## ひ と 言

### 全ての謎を解くキーワード

菅井 仁 (センター運営委員)

雑誌「教育」を読む会の6月例会で次のような文に出合った。  
『民衆を受け身で従順にしておく賢い方法は、議論の枠組みを厳しく制限し、その枠組みのなかで活発な議論を奨励すること』  
アメリカ合衆国で活動する著名な哲学者、言語学者、認知科学者、論理学者であるノーム・チョムスキーの言葉である。  
「学力とは何か」の議論を抜きに学力テスト対策に血眼になる。「学校とはどんなところか」を語らずに、いじめ対策だけが一人歩きする。「子どもが育つ姿」を無視して授業スタンダードとやらで、その形式が縛られる。特定の価値(徳目)を押しつける道徳の授業も根っこは同じで、制限された枠組みのなかでの議論がまん延している。

ことは教育だけではない。貧困格差問題・平和問題・労働問題・社会保障問題など、我が国で、今、正さなければならぬと思うあらゆる分野の問題で、議論の枠組みを制限し、受け身で従順な人々(民衆)をつくり出しているのが、私たちの住むこの国の姿ではないかなと気づかされた。枠組みを取っ払い、自由闊達な議論の場が今こそ必要なのではないだろうか。毎月1回の小さな例会だが、『教育』を読む会は、このような学びができる私の道場でもある。

### 目次

ひと言	菅井 仁	1
特集 岩川直樹 講演記録 「30センチの向こう側へ」		2
加藤公明さん 高校生公開授業報告		14
教育時評 「子どもの権利条約」を活かしていくために	山岸 利次	16
新しい高校入試制度を考える 入試の公平性と透明性の確保	四倉 俊夫	18
子どもと学校 大人になるもんだそれも立派な	矢部 英寿	19
わたしの出会った先生 26 「出会いの中で 今の私が…」	遠藤 利美	21
相談センター報告 第17回 「待つ、見守る」という苦しみと喜び	さとゆきこ	22
おすすめ映画 「金子文子と朴烈」と「主戦場」	長住 康博	24
センターの動き		24

特集

岩川直樹 講演記録

# 30センチの向こう側へ

春の連休明けの5月11日、教育講演会を開催しました。今回は埼玉大学で活躍中の岩川直樹さんを講師としてお招きしました。人間らしい営みに心が動かされるといふ感受性に裏付けされたお話に胸がいっぱいになりました。ぜひ多くの方にも伝えたく、記録を起こし要約しました。読後の感想や「私の経験」など、ぜひお寄せください。

## あと30センチ、近づいていたら

タイトルの30センチというのは、まさに他者への関心ということです。他者への関心をもう少し向けてみようと思いた文章を読むところから始めたいと思います。

教室で帽子をかぶったままの子どもがいれば、マナーがなっていないと見える。「部屋では帽子をとうろね」とやさしく指摘したり指導したりする。しかしあと30センチ近づいていたら、帽子の下のその子のこわばった顔が見えたかもしれない。ああこんなに怯えていたのか。そう感じられたならその子が安心してきる教室をどうにかしてつくっていききたいと思う。

教室で唸り声を上げる子どもがいれば「障害」があると思える。ほかの子どもから離して職員室で自習させたりする。しかしあと30センチ近づいていたら、脇をぎゅっと固めて暴発を必死にとどめようとするその子の姿が見えたかもしれない。ああ

この子はこんなにこらえていたのか。そう感じられたなら、「よく我慢したね」とみんなの前でその子を承認したくなる。

教室で規律を守り、勉強もできる子どもがいれば、なんの「問題」もないと見える。「ほんとうに手のかからないお子さんで」とほめそやしたりする。しかし、あと30センチ近づいていたら、いつでもどこでも同じ笑顔の仮面の向こうから、その子の叫びが聞こえたかもしれない。ああこの子はこんなに感情を押し殺しつつ近づいていたのか。そう感じられたなら、その子がやさぐれた台詞をぶちまけられる音読の授業をやってみたくなる。

あと30センチ。しかし、それがやけに遠いのだ。他者を操作し自己を防衛する技術の鎧を身にまとうことが「有能」とみなされるこの時代、私たちはその鎧を脱いで肌をさらそうとしない限り、ふれることもふれられないこともできない。たとえ「未熟」でも、相手にふれ、ふれられる肌の感触のほうから、その子ども葛藤や格闘に応える学びを共に探り合っていくこと。あと30センチで生まれるコンタクト。学校は、そこを起点にしてあらゆることを問い返す、探究のつぼであっていい。

ここで言っている「あと30センチ近づいていたら」というのはもちろん比喩ですが、関心というのは、まず相手に向かうからこそ相手の何かが迎え入れられるということがありますよね。「向かう」ということと「迎える」というのは、漢字はまったく違いますが、古語では「むかふ」というと「向かう」の意味もあれば「迎える」の意味もあります。一見すると「向かう」と「迎える」は逆のことに思いますが、相手に向かうからこそ相手を迎えるということがあって、そのとき感じるものがある。感じたら応えたくなる。「向かい―迎え」「感じ―応える」、他者への関心ということにはそういう行き来があるんじゃないかと思えます。

今は自分から向かうところから話しましたが、本当はその前があったかも知れないですね。いつも笑顔の子がどこかきつそうに



しているその姿に、自分が呼びかけられていたことに気づいて、その呼びかけに応えようと動いていく。人と人が接する面には、そういう相手と自分との間の行き来が、ある種の繊細な深さでいっぱいあるはずですよ。そういう人間の基本的な関心と応答のいとなみをケアと呼ぶこともできます。

世の中には「〇〇力」と名のつく言葉がいっぱい増えていますが、そう呼んだ瞬間に個人の中にある力のようになってしまう。関係の問題が見えなくなってしまう。人間はいろんな関係の中を生きて元気になったり落ち込んだり、成長していくものです。20年以上前になりますが、このケアという言葉だけは「ケア力」と言ってもほしくないなと思ったりすることがありました。なぜかというと、ケアの本質はケアしケアされる関係が成立することにあるのであって、その関係が成立すればケアされた方はもちろん、ケアした方も元気になる。なのにケアのスキルだけを「ケア力」として語るの浅はかではないかと思ったりからです。

## 人と人との関係を

### 「ケアの三角形」で考える

むしろ、「ケアの三角形」として考えてみたらどうでしょう。誰かにケアされる自分、自分をケアする自分、誰かをケアする自分。三つの頂点で「私」がつくられる。まず、「自分が誰かにケアされる」ということがありますね。いっぱいいっぱいいる時に「最近はどう？」みたいに声をかけてもらう。そうすると、自分をケアできるということがありますよね。誰かが話を聞いてくれたので、少し自分で自分を受けとめられる。例えば、ある事で自分がすごく嫉妬深くなっている、そんな自分がいやになっている時に友人に話したら、「普通そういう時、嫉妬するでしょ」と言って

くれて、ずっと嫉妬にさいなまれていた自分から解放される。そうだよな、こういうときは嫉妬するもんだよなと自分で自分をケアできる。

次に、自分をケアしている時こそ、誰かをケアできるといふことがありますよね。自分のことではいいいいいいの時はまわりに関心が向かない。だけど自分の中で何かが少し落ち着いてくると、あの人のこのころ顔色が暗いな？とか、関心が向くのではないでしょうか。誰かをケアするというのは時間もエネルギーもかかる。ケアしようとしたのにケアできない時はものすごく疲れる。親のケアでうまくケアできなくて喧嘩になっちゃったりすると、ものすごく疲れます。でも相手の表情がちよっとだけ柔らかくなるか、息遣いがゆったりするとか、ケアしケアされる関係が成立した時は不思議なことにケアした側の自分も元気になるということがあります。そうすると最後に自分が本当にいつばいの時に、誰かにケアしてもらおうと自分を開いていくことがしやすくなるということがあります。なぜかというところケアされる関係を成立すれば、ケアした側だって少し元気になるということをもつて味わって、ケアしてもらうことは必ずしも迷惑をかけることではないとわかるからです。これがケアの三角形です。

このケアの三角形、学生たちにピンとこないと言われることが多いになりました。以前は少し話しただけで「ああ、そうだよな」となる学生がわりといたような気がします。今は、その「ああ」がなかなか成り立たない。成り立たない理由はいろいろあります。たとえば今は誰かにケアされるということはすごく難しいです。自分が抱えていることを誰かにちよっと聞いてほしいと言っているのは、ものすごくハードルが高い。なぜかというところ、誰かにケアされるようになったら終わりだという感覚があるんじゃないでしょうか。

誰かにケアされるというのは受け身ですね。だけど、ここにも主体性があるというところ、学生たちはキョトンとします。誰かにケアされる主体性、ピンときますか？ 大学で「信頼のレッスン」というのがあって、起立して立っている学生がそのまま後ろに倒れていく。それを友達が後ろでしっかりと受けとめるということになります。このとき、どちらが大変かといったら、身をゆだねて倒れていく方ですよ。当然相手は受け止めてくれるとわかっているんですよ。でも、思わず怖くて自分を支えようとしたくなります。人に何か自分の悩みを話すというのは、それに近いものがあるんじゃないですか。自分の弱さ、ときには醜さをあらわにしていくわけですから。相手を信頼して開いていこうとするところに主体性はある。それに受動と能動というのは見方や状況によって異なります。「話す」と「聴く」だったらどうですか。普通は話す方を能動と考えますね。でもカウンセリングを考えてみて下さい。カウンセリングしているのは聴いている方です。かなり能動的にカウンセリングしているはずですよ。だから話すことだけが能動とは言えない。「ケアされる」というところ、人から何かされているだけみたいにも思いますが、ケアされるためには自分を開いていくということ

を人生の中で学ばなければいけない。ケアされる経験を生きているということですね。そうすると、この三角形が動き出すんです。まわりの人がケ



アしようとして相手がケアを受けとめたなら、この三角形は動き出す。このところが、とても大事な感じがします。

## 現代社会を覆う「モノサシの三角形」

ケアの三角形とは逆の三角形はすごく通じる。それが「モノサシの三角形」です。誰かにモノサシをあてがわれ、いつも比べられている。いつも標準に達しているかどうかと見られている。そういうモノサシを絶えずあてがわれていると、自分にもそのモノサシをあてがって見ていたり、まわりに対してもそのモノサシで見える。いつもそんなふうに見ているからこそ、自分がそう見られているんじゃないかなと思う。このモノサシの三角形は、学生たちは「そうだな、そういうところを生きている」と言います。もう少し丁寧になると、人間は必ず関係の中を生きている。いい関係、だろが悪い関係だろうが関係の中を生きています。そういう人間を関係から全部切り離しておいて、一般的な基準や尺度をあてがって、そこから逸脱する欠損に問題を押し込める。この三点セットなんです。

代表はコミュカ、コミュニケーション力です。今の学生でコミュカという言葉を使わない人はまずいけません。コミュカがあるない、高い低いという言い方をします。コミュカが高い＝普通～低い、さらにこの下の言葉を学生たちは使います。コミュ障です。どう使うかというと、サークルの自己紹介などで「僕コミュ障なんで、よろしく」と言うわけです。たいていはコミュニケーション障害と診断されているわけではないですよ。そうではなくて、初めての場などでスツと自分を開いていくことができないけど、よろしくという感じで言うんです。あるいはもごもご言っていれば「あいつコミュ障じゃない？」と見るということ。逆に表面的に

でもちよつとうまくまわりと関わっていればコミュカ高いとなる。

もう少し話しますけど、学生たちは「ぼっち」という言葉も使います。ひとりぼっちのことです。どういうときに使うかというところ「ぼっちで講義受けちゃった」とか「ぼっちめし食っちゃった」とか「ぼっちで帰っちゃった」とかです。つまり翻訳すると「一人で講義を受けた」、講義は普通一人で受けるものですよね。一方、学生たちはいつも一緒にいるメンバーを「イツメン」と言ったりして、講義にはイツメンと一緒に来る。イツメン不在がぼっちです。そういう力が働いている中で、ごくたまに岩川の講義おもしろいなと思って、もつと前で聞きたいと思いましたが感想などに書いてくる学生がいる。次の時にその学生は前に来たかなと思ってみると後ろにいるわけです。なぜかというと、イツメンが後ろにいたので、そのイツメンの圏域を越えて一人だけ前にいくのはものすごいエネルギーがいるということなんです。ぼっちという言葉にはそういうネガティブな意味が張り付いている。ひとりぼっちというのは寂しいという意味はありましたけど、何か序列を下げる意味は何もなかった。欠損とか何かできないとか、そういう見方ではないです。しかも、もともとひとりぼっちというのは「一人法師」から来ているらしいです。お坊さんはだいたいの教団に属しているんだけど、教団からはずれちゃったような坊さんのことを一人法師と言っ、そこからひとりぼっちになったと言っんです。一人法師というのは見ようによつてはたくましいと思いませんか。それが、ちよつと人をさげすむ言葉としてぼっちという言葉が使われるのはモノサシのせいじゃないですか。モノサシが蔓延しているからいつの間にかそのモノサシを内面化して、それで相手を見ている、自分を見ているということがあるんじゃないですかね。モノサシだらけになると、先ほどから

ずつと言っている行き来の場（関係のなか）に出ていくことが嫌になる、怖くなる。モノサシをあてがわれて、ちよつと自分のことを話せばそれが自分の本質のように捉えられて、あいつはああいうヤツだとか、ああいうところがおかしいんだと見られてしまう。だったら自分なんて表したくないですよ。

例えば、教育実習に行つて体重が4キロ減つて帰つてきた学生を見れば、大変だったんだろうなと思いますよね。それで「最近どう？」と声をかけると、たぶん学生には心配しているだろうことは普通に伝わりますが、最近の多い反応は「大丈夫です」。もちろん「大丈夫」ではないんです。両手のひらを前に向けて突き出しながらの「大丈夫です」も、よくあります。これ以上入つて来ないで下さいという感じですかね。上の人間に大丈夫じゃないなんて見られたら、いや周りの友だちにでも大丈夫じゃないなんて見られたら終わりでという。そう見られるくらいだったら自分の悩みなんて話したくない。そういう思いの「大丈夫です」なので、接面の行き来は生まれづらいですね。あいだの温度は冷え切つて行きます。

この頃の中学生には一年中マスクをしている子がいます。決してそれは衛生上



ということではなくて、もうマスクを外せない。マスクをしていなくても、あと30センチに書いたような仮面にいる子もいます。いつもいい顔をしよう、いい顔をしようとしていけば一種のマスクですよ。そうやっていつもいい顔をしようとすることに疲れて、風邪かなんかでマスクをしたらいい顔をしなくていいから楽だ、もうマスクは取れない。それくらい自分自身の感じている素顔ではいられない。直に面と向かうことを英語で「face to face」といいますが、実際には「faceless」の関係なんじゃないですか。顔を見せない、顔と顔が合わない。声はどうですか。言葉は交わしているけれども「voiceless」、声は響き合わない。思ひは響き合わない。つまり触れ合えない。「faceless」、「voiceless」、「contactless」になっていく。人と人が接する接面がそうなっていく傾向があると思います。若者たちの身体はそれが如実に表れてくるだけで、社会全体そういう傾向があると思います。その一番大きな要因が、モノサシだと思ふんです。関係が見なくなつてしまふ。関係から切り離れた人にある一般的な尺度をあてがつて、問題はその人の中にあると見る。人間にとって人との関わりは生きるために不可欠、人が人であるためには関わりは不可欠です。そして、それが日々の暮らしの中で失われているからこそ、さまざまな悲鳴を身体があげているのに、そこに向き合わないで、問題は個人の能力不足にあるとみる。こういう状況を問いなおしていくことが大事だと思ふんです。

どんな人間も現代社会を生きる限り、このモノサシの三角形から無縁ではない。実際は、まだら模様だと思ふんです。モノサシの三角形も自分の中にある。いろんなことを気にして生きている。でもケアの三角形だつてどこかにある。気づけば、どこかでケアしケアされる関係というのがある。あるいはこれまであつたはず。なければ生きていけないですから。少なくとも赤ん坊

の時はケアされたわけです。泣いていると「どうしたの?」「おっばい?、おしめ?」と応えてくれる。それを何度も何度も繰り返す。その接面の行き来をずっと生きる。その中で最初は何が苦しいのかさえ赤ちゃんはわからないんだと思いますが、こういう苦しい時はおしめが気持ち悪い時、こういう苦しい時はおっばいがほしい時というように少しずつ苦しみを感じ分けられるようになっていく。やがて泣き声が少し変わったたり、その先に言葉が出て来るわけです。人間の原点にはつねに誰しもケアしケアされる関係、ケアの三角形があるんだと思います。そしてこのケアの三角形で、私を誰かがケアしてくれたということは隣にも三角形があったということですよ。他の人が必ずいたはずですよ。私が誰かをケアしたということは反対隣にも誰かがいたはずですよ。私が私という存在を織りなすことと私たちが私たちの生きる場を織りなすこと、それは一つです。教室である子が元気になるっていくということ、その教室の関係性が変わっていくということは繋がっているんだというのは、教育実践の普通の考え方です。バラバラにしておいて何か能力を鍛えるみたいな発想はなかった。一人の子どもが変わることと教室の関係が変わることを一緒に見るのは当たり前でした。三角形で考えてみれば、そうなりますよね。

## その子の思いや願いが、 その子の中にみえたなら

具体的な話を二つほどしたいと思います。

埼玉県の小学校の1年生にハルト君という子がいて、1年生の時にいろんなことをしてしまいました。乱暴なことをしたり、ひどいことを言ったり、前の女の子の髪をハサミで切ったりもしました。首筋に刃物ですから親御さんたちから何とかし

て下さいということが何件も続いて、ハルト君のお母さんが「もうハルトは学校へはやりません」と不登校にさせたということがあります。そのハルト君が2年生で霜村三二先生に受け持たれることになって、その三二先生から話を聞いたり教室を見に行ったりしたんです。その話をしたいと思います。

三二先生がハルト君の担任に決まったとき、気になっていることがあると言っています。なにかと思ったらハルト君がよく唸ると言うんです。例えば職員室に連れてこられて自習させられている時も唸り出す。そういう場面を担任ではないけれどもいろんなところで見ています。あれって何なのかなあと言っています。それで僕らの前で「うろう」と唸るのをやってみせるんですよ。これ普通の生活のなかで見たら、何かを堪えているのかなと思いますよね。だけど教室にそういう子がいたら、そうは見えない。先ず先生は困ったなと思うかもしれない。どうしたのかなと思うより、どうしようかなと思うかもしれない。学校は、そういう場所です。若い先生だったらそうなっちゃうんじゃないですかね。

でも先生が、ハルト君は堪えている、ここでキレたらまたお母さんを悲しませると思っているとみえたなら、そこには優しさがありますよね。忍耐があり優しさがある。そして堪えていると言っても唸っているわけですから自分なりの言い分もあるわけですね。とすると忍耐、優しさ、主張、どれも人間的に肯定される価値ですよ。うろうろという唸りがモノサシをあてがっている時は異常と見える、マイナスではない。だけどちょっと近づいて、ちよっと関心を向けて、そこに忍耐と優しさと主張がないままになつていいると思えたら、それは人間的に肯定される価値として見えてくるんですよ。言い方を変えると、初めて主体としてその子が見えてくる。生きているんだと、生きてなんか幸せになろうとしてみがいているけど、いろいろやらかしてしまおうという子が

見えてくる。

2年生になってハルト君のお母さんは、ハルト君を学校へやることにしました。その教室に学生を連れて見に行った時、学生が教室の花壇のところに鋭い目をした小動物がいると思ったら、それがハルト君だったというんです。つまりハルト君はみんなと一緒に遊ばせんから、草の陰から鋭い目で見ていた。ところが三三先生が子どもと向かい合いながら楽しく学んでいく中で、ハルト君はどんどん馴染んでいった。6月ぐらいにもう一度見に行った時には、学生はハルトが転校してしまったかと思つたというくらいみんなのなかに普通にいた。それでも人は階段を上るようには変わらないので、行きつ戻りつしてやっぱり何かやらかしてしまふことはあつた。例えば、誰かがしてはいけないことをして注意されると、その子のところに行つて「お前が悪い、お前が悪い。職員室行きだ！」とやる。相手の子は泣いているので三三先生は当然とめて、「ハルト君、2年生になって職員室行きだなんて言つたことないだろ」と諭す。そういう行きつ戻りつの中で、ある時ハルト君がその教室でも唸り声を上げたことがあつた。きつかけは消しゴムの貸し借りみたいな小さいことなんです、唸り出したその声を三三先生はしばらくみていて、その後「ハルト君よくがまんしたね。」と声をかけた。ハルト君はうって泣き出す。まわりの子どもたちはハルトがまんした？ってざわざわしているところに、「だつてそうだろ。去年のハルト君だつたら、もうとつくにキレてたよね」と言う、うんって頷く。ここが大事なところだと思ふんです。ずっと困つたヤツだと見られていたハルト君に三三先生が向かい合つて応えた。そうするとその場に立ち会つていた他の子どもたちのハルト君に向けるまなざしが、これまでとはちよつと違う目で見えるようになる。これ、ハルト君にたつてすごく大きなことですね。周りから困つたヤツだと見られ

ている、この目ほど生きづらいことはないですから。

そうすると三三先生はこのことを学級通信に書く。誰が読むかといえばハルト君のお母さんが読みますよね。そして「ハルトが学校で初めて褒められた日パーティー」をしたそうです。ホットケーキを焼いて生クリームをつけてお祝いしたそうです。そのことを三三先生にお便りにしたためるんですね。今度はお母さんに許可を取つて、それを学級通信に載せて出す。誰が読むかという、ハルト君の教室の他の子どもたちのお母さんお父さんが読む。

1年生の時も一緒だつた保護者の中にはハルト君とハルト君のお母さんはどんな思ひで、学校に来なかつた半年間を家で過ごしていたのかなと、そこに思ひを寄せる。これも他者への関心ですね。そういうことがあつたんじゃないかなと思うのは、2年生の町探検で保護者の方がお手伝いでついで行つた。その時、あるお母さんがちよつと転んだかなにかで擦り傷ができた女の子にハルト君がポケットにあつた絆創膏を渡したのを見たんです。目の前で女の子が擦り傷ができてポケットに絆創膏があつたら渡しますよ。別に取り立てて優しいわけではない。でもそれを見ていたお母さんが、わざわざ三三先生に報告に来る。その姿の中にハルト君やハルト君のお母さん、去年どうだつたかなという思ひがあるんじゃないかというわけです。三三先生は、そういう思ひが動いているから、お互いが関心を向け合っているから、この教室はよくなつていく。それが教室の希望ですと言つてました。

それで3学期の保護者会の終わるころに、「ハルト君のお母さん何かありますか？」と振つたら、顔を上げて「私は今初めて保護者会で顔を上げることが出来ます。これまでみなさんの前で顔を上げることができませんでした。顔を上げると、あそこに貼つてある絵が見えます」と。「エウト君の絵がそこにあつてアカリさんの絵があつて、ハルトの絵があつて、その絵を見ることがで



きるのが、本当にうれしいです」と言った。

僕が何を考えたかというところ、ケアするというのは大変ですね。ただハルト君ならハルト君という一人の子にちゃんと向かい合った時に、その時に起きることは、ハルト君にとって意味があるだけではなくて他の子どもたちにとっても作用を及ぼしている、さらには学級通信とかそういう形で分かち合っていけば保護者たちのまなざしさえ変わってくる。たった一人の子どもと向かい合うことが、一人の子どもに終わらない。ここが面白いところじゃないですか。これは一対一のカウンセラーにはできないですよ。みんなの前でハルト君が今まで向けられたようなまなざしではないまなざしを教師が向けた。そこにケアしケアされる向かい合う関係が成り立つ。触れ合う関係が成り立つ。成り立った時、そのことをそこに立ち会っているみんなが感じるし、まなざしを向けなおしていく。その時に、教室という場が変わる。その場こそがハルト君が立ち上がる場になる。あと30センチでいいから近づいてみる。そのことが持つ意味は一対一の中にとどまらない。そういう例としてお話ししました。

## ケアし・ケアする

### 関係の豊かさをつくるなかで

もう一つお話ししたいと思います。長年通い続けた江東区の小学校の教室にいたケンタ君という子どもの話です。担任の先生は日高先生という初任者でした。当時、僕らが土曜日に行っていた「初任教師と語り合う会」に尋ねて来られたんです。来た時に目がうつろで焦点が合わないような目をしていました。声もかすれていて「ただいま学級崩壊的な状況です」と。きっかけは始業式の日、2年生の教室に行ったらケンタ君という子がいて、なかなか席に

着かない。最初のうちこそ「ケンタ君、ケンタ君」と優しく言っていたけど、教室がなかなか落ち着かないので思わず、「ダメじゃないケンタ君!」と言ったら、その瞬間ケンタ君と自分の糸がぶつくと切れたような感じがした。以来ケンタ君は、ことある事に授業妨害的なことをする。机の上にあるものをばあっと散らかしたり、椅子の上に乗って騒いだり、走り回ったり。2年生ですからケンタ君がそんなふうになっていると周りの子たちにもちよっと連鎖する。一人が二人になり、三人四人となったら、もう学級崩壊的な状況ですね。それでも日高先生は、ケンタ君のことが少しずつわかってきたと言っています。歯科検診したら虫歯ではない歯が一本もなかった。だから十分にケアされていない。それから同僚の先生からお姉ちゃんもいろいろ大変だという話を聞く。家庭の状況は、ケンタ君のお母さんは家を出て行ってしまっていない。お父さんは肉体労働で働きづめに働いて、疲れて帰って寝てしまふ。お婆ちゃんに育てられてはいるけど、お婆ちゃんは何かとケンタ君のことを折檻する。ケンタ君はキレイやすい。ドッチボールで負けて、あいつのせいだと思つと、その子のところに突進して行く。ケンタ君を引き離してしばらくして手を離すと、またばあつと行ってしまう。だから周りからあいつのことは放っておけと言われている。日高先生には言いませんでしたけどケアの三角形の悪循環そのものですよ。誰にもケアされないから自分で自分を受け止めることができない。感情のコントロールができて、いつでも誰かにぶつかっていく。攻撃してるから誰からもケアされなくなる。話を聞いていて、僕は不思議でした。なぜかという目がうつろで声がかすれて、ただいま学級崩壊的な状況で、精神的にいっぱいいっぱいボーダーと言つていいような顔をしている。最初の第一声は「大変なことが起きていますと思つんですけど、それが現実のことのように思えないんです」と言つぐらいですか

ら相当参っている。普通そういう人はきつかけはこうでとか、家庭ではこうでとか、ケンタ君はこうでと語れないだろうと思うんですよ。語り出したらうつと泣き出して、後は言葉にならないみたいなどころから始まるものじゃないですか。でも日高先生は言えたということは、間違いなく同僚が話を聞いてくれてますよね。最初はどうかだったのか、話をずっと聞いてくれていた同僚がいる。

この教室が変わっていく一つのきっかけは、6月の終わりか7月の初めぐらいにあった保護者会でした。日高先生の隣に私が大変敬愛していた稲取校長先生が座っていて、「た、だいま学級崩壊的な状況です。学校の力不足です。日高先生の力不足ではないです」と言いました。まず問題をオープンにしました。その後、隣の日高先生の手をつかんで袖をまくったんです。アザがいっぱいあるんです。子どもたちの暴力は先生にも向かっていて、先生は自分の力不足だと思うから、思わず受けてしまうんですね。そういう傷跡が残っていて、それをかきさしていかなることがあっても、こういう状態が続くのはよくありませんと呼びかけました。問題をオープンにして、一緒に考えて下さいということだと思っただけです。そうしたら次の日から、お母さん方が支えに来てくれた。江東区は最近では高層マンションも建ち並んでいます。生活基盤の厳しい地域です。中国からの引き揚げの方がいたり、在日の方たちがいたり、それから女性のシエルターがあったり、そういう地域です。そういう地域のお母さん方が、いっぱいいっぱいいる時は一人ではどうしようもないと支えに来てくれて、一人二人、多いときは三人ぐらいいたそうです。そんな中でも、あるときケンタ君がキレて、先生の方に突進していったことがあったそうです。それを近くにいたお母さんが背中から抱えて「ダメよケンタ君、先生を殴ったりしちゃ」と言ったら、ケンタ君は腕の中でがたが

た身体を震わせて泣き出した。涙を床にぼたぼた落とすんだけど声をあげずに身体だけ震わせて泣いている。思わず抱きかかえている保護者の方も一瞬涙ぐむ。その場面を呆然と立ち尽くして見ていた日高先生の傍らにいたもう一人の保護者の方が「先生もあんなふうになれたらいいわね」と言ってくれたそうです。その話をしてくれた時の日高先生の声は、もうかすれていませんでした。その時に、この教室には希望があるなと思えました。だってケアアシケアされる関係は成立していないかも知れないけど、日高先生は一生懸命ケアしようとしている。同僚は話を聞いてくれていて。管理職も身体を張って保護者と関係をつくらうとしている。保護者の方たちも呼びかけに応えるように支えに来てくれている。この教室の場の関わりは、確実に豊かになっている。日高先生の教室は、3学期はいわゆる学級崩壊という状態ではなくなつて、それなりの落ち着きを取り戻して行きました。しかしケンタ君は時々暴れたり、暴れなくても机に突っ伏したままでした。

3年生になって、担任が替わりました。3、4年生の時も授業を見に行くことがありました。ケンタ君は、どんな授業をやっている時も机に顔を突っ伏したままでした。国語の授業の時もそうでした。ずっと突っ伏したまま時々「うつせんだよ」とか、机を叩いたりしている。授業が終わった後には授業研究があつて、この学校は、子どものことを語り合うことを大事にしていた。その中で「今日もケンタ君は授業に参加していませんでしたけど、いつもあんな感じなんですか？」という話になった。その時に稲取校長先生が、「いや、あれでケンタ君は結構授業に参加しているんじゃないか。だって暴言吐くタイミングがよかった」と言っていて、みんなも笑い出した。それは担任の先生もよくやっていると励ましの意味もあつてのことですが、参加していた先生方や僕は、そっぴやケンタ君は毎日学校に来てるな、どの授業にだって

いるんだよなって。どんな思いで学校に来て、どんな思いで突っ伏しているのかな。あれを参加していないと言っているのかな。あいつはあいつなりにがんばってあそこにいるんじゃないかと思えるようになったと思うんです。たった一言「あれで結構参加しているんじゃないか」、「暴言吐くタイミンがいいもん」と、たった一言だけでも、稲取校長先生がケンタ君をこう見たと語ったことによつて、周りの教師たちがケンタ君をみる見方あるいはケンタ君の担任をみる見方が変わりますよね。それは、すごく大きな事だったんじゃないかと思います。

5年生になると、担任はベテランの木部先生という方になりました。今も僕らと一緒に研究会とかやっている先生です。木部先生はケンタ君を担当すると決まった時から一つはつきり決めていたことがあったと言っています。それはケンタ君を特別扱いしない。特別なことはいっぱいするんだけど、なるべく特別な目で見ない。ああ、またケンタがという目でとにかく見ない。それだけは決めていたと言っています。クラス替えで初めてケンタ君と会うような子どももいて、ケンタ君がいろんなことをやると木部先生に報告に来る。例えば、掃除の時間に「廊下でケンタがバケツをひっくり返しちゃった」と言ってくる。そうすると木部先生は、「何でケンタ君はバケツの水をひっくり返したの？」と問い返したりする。すると「ケンタはわけもなくキレちゃうんだよ」って応えますよね。ケンタ君はそういうキレやすい存在ですから。「本当に何のきつかけもなかったの？」と尋ねると、そこでちよつと辿り返す。あなたはケンタ君をどう見たのか、どう応えたのか。応えないという応え方も含めて、どうしたのかということを見て行くようなことをしたらいいんです。でも5年生の時も授業を見ましたけど、ケンタ君はやっぱり机に突っ伏したままでした。

## 向かい—迎え入れる関係の中で 立ち上がるケンタ君と子どもたち

ところが6年生の時に、目を見張ったんです。道徳の授業を見に行った時でした。芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の授業です。カンダタという極悪人がいて、今地獄の池で苦しんでいるんだけど、それを極楽の蓮の池から見たお釈迦様が糸を垂らします。何でかというところ、カンダタが生前蜘蛛を踏みつけようとしてやめたというところがあった、善行とは呼べませんが、そのところがあったので糸を垂らした。カンダタが糸を登っていく途中でふと振り返ると、下から地獄の亡者がどんどん登ってくるので、「この亡者ども、これは俺の糸だ」と言った瞬間、糸がプツンと切れてしまふという話です。教科書には当然ながら価値項目が設定されていて、「節制」ということになってました。あんまり欲ばっちゃいけないということらしいです。授業は普通どうやるかというところ、子どもたちに「何で切れたと思う？」と聞いて「自分だけ助かろうとしたから」、「そうだね、みんな自分のことばかり考えないようにならね」という感じでした。木部先生も特別な発問はしなかった。「これ切れたけど、なんで切れたと思う？」と聞いた。そうするとやっぱり、クラスの中のそれなりに育ちのいい女の子が手を上げて「これはカンダタが自分だけ助かろうと思つたので切れたと思います」と言うわけです。その時に、ケンタ君が手を挙げてた。ケンタ君は、この話を先生に読んでもらつている最初から間違はなくカンダタの立場で聞いてましたね。日ごろのポジションがどちらかというところ、カンダタ寄りですから、カンダタの身になって聞いている。主人公はカンダタだし、カンダタは悪くないと思いたい。彼が出した結論は、重量オーバーでした。最後の一人の亡者

の重量で切れたと言ったわけです。そうしたら周りの他の女の子たちとかが「えっ、これはお釈迦様の作った糸なので特別な糸で、そんなことでは切れないと思います」と言ったりする。そうするとケンタ君が「そんなことどこに書いてあるんだ」と言うわけです。そのへんで僕らはうるうるしていた。わかりますか？ ケンタ君、授業にフル参加です。しかも、しばらくしたらある男の子が「さっきケンタ君は重量オーバーと言ったけど、これはあの世の話でしょ。もう体重ないんじゃない」と言った。そうしたら頭を抱えて、体重、そう言えない”みたいな反応をしている。ケンタ君の世界観の中でもあの世には体重がない。納得すべき根拠を示されたら問い返したわけです。自分の意見を言った。相手から言われても納得できなければ簡単に変えない。でも納得すべき根拠を示されたら率直に問いなおした。この三点セットができれば、どこに行つたつてかなり学べるじゃないですか。このケンタ君の姿はどこから生まれてきたのか。

ケンタ君は、突つ伏していたわけですね。だけどケンタ君のことは放つときなさいじゃありませんでした。この教室は、ケンタ君にちよつと関心に向けてケンタ君に伝えていくことを選びました。そうすると、だんだんケンタ君のことは周りの子どもたちの中に入つていった。ケンタ君は、家でお婆ちゃんに叱られた日はキレやすいんだよとか。ケンタ君は5年生6年生なのに、あまり情報がないからちよつと幼いところがあつて、あんまり可愛いくないけど、ちよつと可愛いなとか。ケンタ君が暴言を吐いたときに暴言で返すとひどいことになるけど、ちよつとユーモラスに返したりすると妙に会話が成り立つたりするとか。そういうことでケンタ君の姿がみんなの中に迎え入れられるということがありますね。今日の話の出発点ですけど、ケンタ君に向かつたんでケンタ君を迎え入れるということがあるんじゃないですか。ケン

タ君のことに感じてケンタ君に伝えることもあつたと思います。そうすると反対にケンタ君の中にその子たちの姿が迎え入れられるということがありますよね。ずつと突つ張つて他者のいない世界を生きているケンタ君の世界に最初に入つてくるのは自分と向かい合つてくれた人じゃないですかね。そうすると彼がこの教室にいる居場所ができる。そこから顔が上がつて、立ち上がつていくことができる。そういう足場が生まれたんじゃないか。他者に迎え入れられて他者を迎え入れるという関係が生まれていった。その出発点は、やつぱり木部先生じゃないですか。木部先生が向かい合つて迎え入れていたからこそ、子どもたちの中にもそれらが生まれて行つたんだと思うんです。

ところで同じ芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の話を読んでも、片方はお釈迦様目線で考え、もう片方のケンタ君とかはカンダタ目線で考えている。この違いは何によつて生まれるのか。学生に問ひかけると、性格の違いとか個性の違いとか言つたりします。ちよつと抽象的ですね。そこには生きている境遇の違いがありますね。高層マンションで暮らしているような生活にゆとりがある子たちは、自然にお釈迦様目線で見ている。そして学校というところは基本的には中産階級寄りにできているので、言葉使い一つから様々な感受性や価値観も明らかに中産階級寄りの感じ方・考え方が肯定されて、そうでない感じ方・考え方は肯定されないことになる。つまり学校は差別しているわけではないけれど、学校が形成する文化に入りやすい子と入りにくい子がいて、教室で自然にしている肯定される子と、自然にしていると否定される子がいる。それがまさに社会学者のいう学校で格差が再生産されると言うことです。

ところがこの教室はちよつと違つたんですね。山本君という子が手を挙げて「僕はこの話わかりません。だつてお釈迦様はカン

夕夕を救おうとしたんでしょ。なのにどうしてカンダタがたった一回暴言吐いたくらいで諦めちゃったの。ということは、このお釈迦様という人、キレやすい人？」と言ったんです。みんなで笑った。笑った後にすぐ奥深いものを感じた。この山本君の声はいつたどこから生まれたんだろう。なるほど山本君はどちらかという段階的には恵まれていて、弁護士になりたという子でしたけど、でもこの声は、階層ではないんですよね。この声はやっぱりケンタ君とともに生活し、ともに学んできたこの教室の教育実践の歴史から生まれた声です。ケンタ君にとって意味があるだけじゃなくて、山本君にとっても意味がある。学校というのは、とりわけ義務教育はあらゆる子どもたちがいます。そこでこういう学びの場を経験することができれば、大人になってから自分とは違う境遇、違う階層にいる人たちに対して知らねえよと無関心にはならないと思うんです。事実、子どもたちが中学3年生の時に一人の子が、中学の途中で不登校になる子とかいたけど、あの時のクラスメイトは全員高校に進学しましたと木部先生にはがきを送ってきた。

ケンタ君という一人の子とも教師がどう向かい合うかという話ではハルト君と同じですけど、前の話と違うのは、一人の子どもを支えるのにいろんな人がいたということです。初任の日高先生もがんばりました。保護者の方たちも支えてくれました。中学年の時の先生もがんばったし、協議会でもみんなで語りあった。子どもが自己形成の葛藤をしながら大人になって行くプロセスの傍らにどれだけの他者がいるか。もつと言えば、傍らに大人がいようとしているか。子どもが今どんな思いで、何と葛藤しながら何を越えようとしているかにちよつとでも関心があるかが大事なんじゃないかと思うんです。最後に、「もつと子どもを語ろう」を読みたいと思います。こういう文化は失

われてきたけれどなくなつてはいない。もう一度こういう文化の大切さに立ち返りたいという思いで書きました。

### もつと子どもを語ろう

もつと子どもを語ろう。

あれができない、これができないじゃなく、

その子どもがなにを越えようとしているかを。

もつと子どものいまを語ろう。

その子どもが歩んだこれまでを思い返したり、

その子どもが迎えるこれからに思いを馳せながら。

もつと子どもと向かい合う自分を語ろう。

その子どもを語ることは自分を見つめ直すこと、

その子どもを語り直すことは自分を問い直すことなんだから。

もつと子どもの葛藤や格闘を語ろう。

そこに私たち大人のものの方が影を落とし、

そこに私たちの社会の矛盾が編み込まれているのだから。

もつと子どもに伝える教育を語ろう。

子どもたちみんなに施すことではなく、

その子どもに伝えることに教育の意味を見いだそう。

そこからしか、その子どもの教育ははじまらない。

そのなかでしか、その子どもの教師にはなれない。

もつと子どもを語ろう。

その子どもを語り直しつづける大人こそが、

その子どもの学びの道連れになれるのだから。

# 加藤公明さん 高校生公開授業 報告



今年の2月10日、恒例の高校生公開授業を開催しました。今回の講師は歴史教育の第一人者である加藤公明先生に引き受けていただきました。教材は、鎌倉時代末期に活躍した時宗の開祖である一遍の伝記を描いた絵巻「一遍上人絵伝」(図上)。

授業は席替えによる「えええ」という驚き(?)の声から始まり、「異時同図法」という技法で描かれた一枚の絵を見ながら、生徒たちとどんなものが描かれているかを見つけ出し、あるいは一枚の絵巻のなかにもどのような時間認識が描かれているかなどを理解することを通して、当時の人々のくらしや意識、時代イメージを作り上げていくというものでした。

一枚の絵巻物から見つけ出した市の様子や出来

事、それらへの疑問や不思議に 대응することに徹して授業が進められました。生徒たちは見落としていた描写からイメージを膨らませて絵に描かれている市の様子、これは何だろう、不思議だなあと思うことなどをそれぞれに挙げていきました。加藤先生は、出された疑問や意見の一つひとつを取り上げながら、それが何を描き、そこからどのようなことが見えてくるのかを丁寧に生徒たちと考え応えていきました。今回の授業は、歴史学に対する深い理解と見識、そして教材研究の大切さはもちろんですが、授業は誰にどのような責任を持つべきなのかという、そういう根本的な問題も私たちに提起してくれていたように思いました。(菅井)

## 《高校生の感想》

■将来、日本史の研究職に就きたいと思っているので、自分で疑問を見つけて解決するという経験ができて、とても有意義な時間を過ごせました。教科書を理解するだけの勉強では足りないと感じ、今後の学習に活かしたいと思います。(MK)

■とても楽しく受講することができました。学校では日本史を学んでいなくても理解ができ、新しい授業形態であると感じました。歴史を学びたい者として、新たな観点から見たり、他の人の仮説を聞くことの大切さな

どを知ることができて良かったです。

(RF)

■これまで歴史は暗記だと思っていた。でも今日の授業に参加して、歴史は暗記だけでは分からないというところに気がつきました。暗記だけではおもしろさが分かりませんでしたが、1枚の絵画から背景知識だけで、こんなにおもしろさが広がるものだと思いました。歴史を背景知識のつながりによつて読み解けば、これまでとはまったく違った見方ができるのだと気づきました。2年生になります。楽しんで学べそうです。

学校の授業も加藤先生の授業のようであつたらと思います。(YW)

(YW)

■普段から、物理や化学、数学で行っていた「なぜ？」を突き詰めることを歴史でもやれるとは思わなかった。日本史や世界史のような、歴史の分野において突き詰めるには、ある程度答えを知っている人がいないと、ただの想像で終わってしまうので、今回、一度はやってみたいかつたことができたので楽しかったです。

また、一遍上人絵伝に描かれている中から、何を売っているかを探していたとき、色々なところに目を向けられたと思っていたが、他の人の



方が鋭い視点で物事を見ていたので、もっと注意深く読み解かなければと感じました。日本史の授業を受けていなかっただにもかかわらず、とても楽しく学ぶことができました。

今回のような生徒に考えさせ、意見を集約して考えを導きだし整理するという授業の方が、頭に入りやすいと実感したので、学校の授業でもこのような方法を取った方がいいと感じましたが、生徒の積極性によって進具合が左右されそうなので難しいんだらうなと考えました。(TU)

■私は日本史が好きで、大学でも歴史を勉強したいと思っていたところ、



先生に今回の公開授業があることを聞き、参加しました。

日本史の授業というところ、カッコリしたまじめな授業というイメージがあるのですが、今日の授業はそのようなイメージをくつがえすものでした。最初に座席をシャッフルした時は驚きました。初対面の人たちとペアワークで意見交換するのは不安でしたが、実際にやってみると、すごく楽しかったです。初対面の一期一会な人同士だからこそ、お互いの意見交換や二人で考えるのがスムーズにできたと思います。

■加藤先生の授業は日本史の楽しさがすぐくわかって、日本史が苦手な人にこそ受けてもらいたいような授業でした。私も将来、日本史の楽しさをたくさんの人に伝えたいです。(TK)

■授業内容の予想などまったくしていなかったが、一枚の絵図から時代背景を学び取るなどというのは想像の中に一切無く驚いた。絵に描かれている情景、そしてその一つひとつを紐解いて「どうしてこの状況になったのか」を知り、その情報を積み重ねていくことによって、その時代について(その時代のすがたの一部)が頭の中で組み立てられていくように知ることができた。(MO)

### 《参観教師の感想》

■「謎解き」をしていくという最初のお話の通り、普段の授業ではさざっと眺めるだけの絵画史料をじっくり見ているうちに、生徒たちの中に、どんどん「探究」する心が生まれていったように思います。絵画はその時代を知る一級の史料であり、当時のリアルな暮らしや生き方に迫る手段として活用されていて、鎌倉時代にタイムスリップしているような感覚になりました。本当に細かいところにこそ真実がある！と実感しました。

とくに古い時代を扱う際には、今と全く異なる時間・空間観念や、世



界観、常識について理解することで、単に「へんだ。おかしい」から、多様な考え方ができるようになると、歴史を学ぶ本当の意義が実現されると思います。

■今回の授業では、改めて歴史を教える側の人間として、どういうところを大切にすべきかを考えさせられました。(RM)

■加藤先生の仕事の意義は、実践記録や実教出版・高校日本史教科書で知っていました。実際の生徒を相手に授業をどのように展開するのかを参観でき、歴史の探究を促す指導のあり方を実感できました。

■絵図を読み解きながら、鎌倉時代の市の性格「市の平和」、仏教のあり方(古代とのちがいが)、女性の地位・生き方、身障者の「聖」、「性」、老人と子どもの関係を知ることができ、時間が過ぎるのを忘れて引き込まれました。

■「異時同図法」という絵図の技法から、当時の時間観念を知ることでもできたのは収穫です。現代の価値観を相対化するのに、庶民の生活に注目した歴史学習が不可欠だと再認識しました。大学生の歴史への「無関心」「無知」に危機感を覚える日々の中、私自身、歴史学習のとらえ方、学生と歴史の出会いせ方を改めなければならぬと思います。(TY)

# 「子どもの権利条約」を 活かしていくために

—第4・5回統合報告審査から—

山岸 次次

はじめに

本年3月、国連子どもの権利委員会(The Committee on the Rights of the Child, CRC)は「子どもの権利条約」に定められた締約国への報告審査制度のもと、日本の子どもへの権利状況についての審査を行い、その結果を「最終所見」として公表しました。私は、報告審査制度を用いながら「条約」の理念の実現を目指すNGOである「子どもの権利条約・NGOの会」に関わってきましたが、こうした立場から、①「条約」の審査制度の概要②今次の審査(第4・5回)における論点③「所見」の内容、の3点について記したいと思います。

## 1 「子どもの権利条約」の

### 報告審査制度の概要

報告審査制度は5年ごとに締約国が「条約」の遵守状況を報告し、CRCがそれを締約国

との「建設的な対話」をしながら審査するものです(44条)。政府報告は往々にして実態を自らに有利なように歪曲してしまうものですが、これを克服するため、CRCが締約国のNGOや人権機関から専門的な助言をうけることを「条約」は定めています(45条(a))。CRCは市民・NGOからの報告書であるカウンタ・レポートを広く求め、また、レポートを提出した団体からヒヤリングを行い、その結果を踏まえて審査を行います。今次審査では、2017年7月に日本政府が報告書を提出、同年11月までに市民・NGOによるカウンタ・レポートの提出、翌2018年2月にCRCによるレポートを提出した団体へのヒヤリングを含めた予備審査の実施及び政府への質問項目の決定、同年12月に市民・NGOによる第2次カウンタ・レポートの提出、そして、本年1月の政府関係者へのヒヤリングを含めた本審査の実施がなされました。こうした過程を経て本年2月に「所見」が公表されたのです。

## 2 第4・5回報告審査の論点

今次審査は第3回審査終了後の2010年以降の状況が対象となりました。これは東日本大震災を経た後の自民党の政権復帰、第2次安倍政権の時期をカバーするもので、この間の新自由主義・新国家主義的教育動向の評価が報告審査の大きなトピックでした。

新自由主義教育政策につき、これまでもCRCは日本の教育の過度に競争的な教育制度が子どもの心と体に否定的な影響を与えることに懸念を示してきました。これに対し、今次政府報告書は「高度に競争的な学校環境が、就学年齢にある児童の間で、いじめ、精神障害、不登校、中途退学、自殺を助長している可能性がある」との認識を持ち続けるのであれば、その客観的な根拠について明らかにされたい」と、CRCにいわばケンカを売るような姿勢を示しました。ここから、「子どもの権利」に関わる市民・CRCにとって、日本の子どもが新自由主義のもといかなる状況になるのかを根拠を持って明らかにすることが課題の一つとなりました。

カウンタ・レポートを提出した団体数は25に上りますが、その一つである「子どもの権利条約・NGOの会」はレポートのタイトルを「格差社会における『子ども期の貧困化』」としました。新自由主義政策により社会の格差化が進行するなかで、すべての子どもにも保障されるべき「子ども期」が質・量的に「貧困化」されている。本レポートはそのことを学齢期の子ども「不登校」「校内暴力」「いじめ」「自殺」の経時的変化という根拠を持って示し、また、「警戒的過覚醒状態」という、被害待児に比することのできる過度の緊張状態に日本の子ども達が置かれているということを生理学的観点から明らかにしました。また、子ども



もの成長発達においては必要不可欠であるはずの「自由な時間」が日本の子どもには保障されていないということも、「自由時間」の原理的な意味を明らかにしたうえで問題提起しました。そして、子どもの権利保障における「三つのPとR」——市場化に対抗するための現物・現金の「給付(Provision)」、生命・生存・発達を脅かす行為からの「保護(Protection)」、主体となる発達のプロセスを保障するための「参加(Participation)」、そして、規制緩和と貧困の拡大に対抗し、子どもに「受容的・応答的關係」を保障するための労使関係への介入を行うための「機制(Regulation)」——が国家の果たすべき責任・役割であると主張したのでした。

### 3 「総括所見」の内容

「所見」は広範囲をカバーするものですが、ここではその特徴と教育・保育に関わるものをピックアップして紹介します。「所見」は日本の子どもたちの危機的状況を批判的に捉えています。政府に対する三つの基本的な勧告が含まれています。第1に、日本の子ども期の貧困化に対し、競争的な社会から「子ども期」を守り、「子どもがその子ども期を享受することを確保するための措置をとること」、第2に日本の子どもが「意見表明権」(12条)を十分に保障されていない現状に対して、それを「可能にする環境」を提供し、かつ、教育や家庭などのあらゆる育ちの場面で、「すべての子どもにとって意義があり、その力を伸ばし発揮

させるような(empowered)参加を積極的に促進すること」、第3に、自殺や学校事故、虐待や性的搾取、体罰や思春期のメンタル・ヘルス等に関わり、「子どもの保護に関する包括的な政策」を発展させること。新自由主義的政策の進展に伴い国家の大規模な撤退に対し、CRCは日本政府に対し「子どもの権利」保障のために国家が果たすべき義務・役割を提示したのでした。

また、日本の教育の競争主義的性格の認識は——政府報告書の強弁にも関わらず——なお維持され、「あまりにも(went)競争的な制度を含むストレスフルな学校環境から子どもを解放することを目的とする措置を強化すること」が勧告されました。さらに、保育——今回はじめて明示的に取り上げられました——については、保育の市場化が教育の市場化と同様の問題が胚胎していることに注意を喚起し、保育サービスの条件整備や質・量の保障を勧告しているということも見逃せません。

#### おわりに

CRCは「所見」を通じて日本の市民・NGOに積極的に応答したものと評価することができます。「条約」の特筆すべきところは、政府を超えて市民・NGOが直接に国際機関であるCRCとやり取りし、「子どもの権利」保障を実践するためのアクションを起こすことができるということ。しかし、なお課題があるといわざるを得ません。「所見」は市

民・NGO、そして子どもに関わる専門職を勇気づけるものではありませんが、法的拘束力があるわけではありません。現政権において如実に現れている国連への否定的スタンスは、「所見」を素直に読み、反省するという姿勢を政府に期待することがいかに困難かを示しているでしょう。「所見」を生かし、「子どもの権利」を実現することは私たち一人ひとりにかかっているといえます。そのためにも、「所見」の読解、そして、それをもとにした取り組みが求められます。

付記 本稿を執筆するうえで、「民主教育をすすめる宮城の会」主催の世取山洋介先生(新潟大学、「子どもの権利条約市民・NGOの会」事務局長)の講演(第4・5回日本政府報告書に対する最終所見を読み解く)2019年4月27日開催、及び、子どもの権利条約市民・NGOの会編「国連子どもの権利委員会日本政府第4・5回統合報告審査最終所見翻訳と解説」(2019年3月)を参照しました。「子どもの権利条約市民・NGOの会」についてはホームページ(<https://crrcoalitionjapan.wixsite.com/crc-coalition-japan>)を参照下さい。

(宮城大学)



センターで取り扱っています。  
ご希望の方は連絡下さい。

# 入試の公平性と透明性の確保

## 四 倉 俊 夫

公立高校の入試で一番大切なことは、「公平性の確保」です。これは、入試の可否が、その後の人生を大きく左右する可能性があるからです。当然のことです。特定の生徒に有利な、または不利な選抜が行われることはもちろん、結果に疑問が残るような選抜であってはけません。

次に、この「公平性確保」のために必要になるのが、「透明性の確保」です。「透明性」なしには、「公平性」は確保できません。ご存じのとおり、令和二年度から新入試制度が導入されることになりました。この新入試制度は、簡単に言うと、学科の募集定員を一定割合で「共通選抜」の定員と「特色選抜」の定員に分け、一度の学力検査（テスト）で、二回の選抜を行うというものです。

例えば、初めに共通選抜を行う高校の場合、まず、学力検査と調査書を元に共通選抜の定員まで合格者を確定し、次に、共通選抜で不合格になった受験生を対象に「特色選抜」を実施して、最終的に学科全体の合格者を確定することになります。

ここで問題になるのは、冒頭で取り上げた「公平性」と「透明性」の確保です。

「共通選抜」については、審査基準と審査方法が明確であり、高い「公平性」が確保されます。また、結果を受験生本人に開示することで、「透明性」もある程度保障されます。しかし、「特色選抜」は、その運用を一步間違えると、「公平性」と「透明性」が大きく損なわれる危険があるのです。

では、「特色選抜」のどこに問題があるのでしょうか。

「特色選抜」は、まず、調査書と学力検査、学校独自検査（面接や作文、実技等）の結果を、各高校が定めた選抜方法で計算し、受験生を順位化します。そして、この順位に「調査書の記載事項」を加味して総合的に可否が決定されます。

ここで、問題になる点が二点あります。

第一点は、「調査書の記載事項」例えば、生徒会活動やボランティア活動等の実績、部活動の成績等がどの程度加味されるのかが分らないこと。第二点は、「特色選抜」の審査範囲の上限が、200%では広すぎるのではないかとということです。200%という数字は、場合によっては、共通選抜で不合格になった全ての受験生が特色選抜の審査対象になる、ということです。ということは、「特色選抜の順位では、はるかに合格圏外にいる受験生が、「調査書の記載事項」の加味のされかたによっては合格になることもあり得る」ということです。逆に言えば、本来なら合格するはずだった誰かが涙をのむ、ということでもありません。極端な考え方をすると、中学時代、しっかりと勉強もせず、部活動ばかりして、学力検査の点数も低かった受験生が、「調査書の記載事項」を高く評価されて合格し、代わりに真面目に三年間を過ごした受験生が不合格になることもあり得る、ということになります。

これは、「公平」でしょうか。そして、こういった可能性（危険性）が考えられる特色選抜は「不透明な選抜」といえるのではないのでしょうか。加えて、特色選抜の結果は一切開示されません。ということは、ブラックボックスの中での選抜ということになります。

そこで、宮城県教職員組合では、①特色選抜の審査範囲を最大150%に制限すること、②特色選抜の割合を低く制限すること、③特色選抜の結果を何らかの形で開示すること、を大きな柱とした請願を県教育委員会に提出したわけです。合格するはずだった生徒の涙を見るのは、中学校教師としては本当に辛いのです。

大人になるもんだ  
それも立派な

矢部 英寿

去年の冬、ずいぶん前の卒業生が一人赤ちゃんを抱いて学校に訪ねてきました。A子といえます。私に用事があったのですが、

あいにく私とは会えず、携帯電話の番号をメモした紙を置いていきました。電話をしてみました。「ちよつと学校行くから、先生いる？」というので夕方待つていました。その卒業生は暗い中で一人で来ました。しばらくぶりに会ったその子は笑顔でした。私も笑顔。「どうした？」と聞くと、「結婚式をすることになったんだけど、先生に来てもらいたくて」ということでした。パートナーとはすでに一緒に暮らしていて、子どもも二人いるとのこと。私は、彼女が結婚式をするということがとてもうれしくて、何度も「おめでとつ」と繰り返していました。「住所教えて下さい。案内状をそのうち送ります」と言われて教えてから、「何回も来てくれてごめんね」と私が言う

と、「こういうのはちゃんと会って言わない」と彼女は言つて帰っていきました。

\* \*

A子と私が初めて会つたのは彼女が中学2年生の時です。私は転勤してきたばかり。今から10年前です。4、5人の仲間と授業を抜け出してどこかに隠れていました。スカートをはくはき、制服のリボンをだらつと下げていました。担当する学年は違いましたが、よく授業時間中にそのグループに会いました。「があくんばれつ」と一声かけると「その言い方好き」というだけ言つて流していました。トラブルもよくありました。他校の生徒ともつながつていました。突然ぶち切れた時の剣幕はたいへんなものでした。

その子たちの2年生が終わろうとする3月11日、大きな地震と津波が学区を襲いました。学校の校門から数十メートルのと

ころで津波は止まりました。校舎や体育館、校庭やプールは津波の影響を受けずにすみました。3日くらいかけて、私たち教員は生徒の所在確認を二重三重に行いました。被害を受けなかった体育館も校舎も武道場も避難所になり、私たちはその運営に携わりました。避難所となった体育館の中に、その子の家族がいました。自宅が津波にやられていました。父と母とその子と家から連れてきた犬がいました。家族での関わりの薄かったその子は、この時、突然に家族と濃密な時間を過ごすことになりました。友達やクラスとの関わりは途切れ、ケータイもつながらずテレビさえない時間を、父と母とペットとで過ごしていました。中学校の広い体育館に何百人も避難してました。その子の家族にはその一角の狭いスペースが与えられました。夜更かしばかりだったその子も早く寝ていました。実はこの避難所生活は、その子にとっては穏やかで安定した生活となりました。日中、体育館の外に出て、家族でベンチに座り犬をなでていたその子は、ホツとしたような顔をしていたのを覚えています。私も寄つていつて、犬のことを聞いたりしておしゃべりしました。お母さんもお父さんも、穏やかな顔でした。

生徒の所在の確認や、避難所の運営と並行して新年度の準備も始まりました。私はA子のいる学年に新年度から学年主任とし

て入ることになりました。校舎と体育館の避難所は4月の半ばに閉鎖となりました。

この年は4月21日が始業式と入学式でした。震災後しばらくぶりに登校し、昇降口のところで仲間と再会したときの子どものうれしそうな顔を私ははつきりと覚えています。その中に、借りた運動着とビンのクロックスのサンダルでその子は登校してきました。制服もカバンも流されていきました。それでも仲間との再会をうれしうにしていきました。例年4月に行っていた体育祭は中止になりました。5月の修学旅行は、学年の保護者と相談したうえで、ぜひ行かせたいということになり、交通手段を新幹線からバスに代えて行くことにしました。バスで学校に帰ってきたときの、子どもたちと迎えにきた保護者の方々の顔は、いつもの年とは違う、ホッとしたような顔でした。A子は仲間の友達と帰っていきました。6月の中総体は中止も検討されましたが、強行開催でした。そして7月を迎え夏休みに入りました。この頃には、学校は例年のような生活を取り戻しはじめました。それに合わせるようにA子の生活もまた元に戻り始めました。夏休み明けには髪を茶色に染め、ピアスを外さずに登校してきました。授業時間に4、5人でいなくなり、探しても見つからないことがよくありました。

10月に合唱コンクールがありました。例

年のように市内の施設で行うことができず、バスを借りて遠くまでかけて行うことになりました。3年生なので、合唱を歌うのは午後です。それまでに、茶髪をなおさせ、ピアスはずす約束でした。茶髪をなおすまでは私も手伝いながら何とかしました。学年のもう一人の教員と私とで、A子とその仲間を会場の外に連れ出して、「ピアスはずせ、それは約束だ」とせまります。「ゼツタイはずさねえ」とA子も頑張ります。そのうちA子は「もう、合唱なんか出ねえ」と言い始めます。私ともう一人の先生で「ゼツタイ歌え」とやります。ついにA子はぐちゃぐちゃに泣きながら「うるせーんだ」と叫んだ後でピアスはずして会場に戻りました。私もA子のピアスをポケットに入れて会場に戻り、A子の合唱を見届けました。

2学期半ばを過ぎた頃から、頻繁に学年集会を行いました。なりふり構わず、学年の生徒たちに、「君たちはどうしたいの」「君たちはどうなりたいの」そして「震災を経験した者としてそれでいいの」「もうすぐ、卒業がきてしまう」とたたみかけました。3学期になってからは、何回も何回も書かせました。「どうしたいの」「どうなりたいの」「震災を経験した者として、じいさんばあさんになった時、孫たちに何を語るの」と。そして最後にそんなことのまとめを小さな色紙に書かせました。A子は「私は、震災

があつたことを一生忘れません。これからは命も、家族も、友達もみんな大事にしていきます」と書きました。家族とのあの濃密な時間はA子にとつてやはり大事な時間だったのかもしれない。

3月に入つて、卒業式のリハーサルがありました。学年の記念合唱は「証」です。リハーサルからA子とその仲間たちは泣きそうになりながら大きな口をあけて歌っていました。見に来ていた校長先生はリハーサルなのに泣いていました。もちろん、卒業式当日の学年記念合唱はA子はぐちゃぐちゃに泣きながら歌っていました。

\* \*

今年の春、私はこの学校から転勤することになりました。離任式を終えて体育館から出るとA子とその仲間たちが、それぞれに子どもを抱いて待ち構えていました。その小さな子どもたちがまためつぼうかわい。「ママの先生ですよお」つて私を紹介するのです。花束やら、自分たちが中学校の時にやんちゃをやらかしていた時の写真を入れた写真立てをいた、いただきました。私は家に帰つてすぐに、その花束や写真立てを自分の横に置いて、オートシャッターで写真を撮りました。「大人になるもんだ、それも立派な」と口からこぼれたのです。

(宮城県中学校)

「人生は出会いである」私の好きな言葉です。文字通り、小学校時代から中学、高校、大学、そして教員になってからまで、多くの先生方との出会いがあり、皆さんのお人柄や言葉からたくさんのお話を学んで今の自分がいると実感しています。

立町小学校の秋山恭広先生は5年生の時、あまり勉強ができなかった私に、「努力している」というだけで通信票に良い成績を付けてくれました。どれだけ自信が付き、励みになったか知れません。仙台二高時代は体育の教員でラグビー部顧問の岡崎忠先生との出会いがありました。気さくで生徒思い。人としてのスケールの大きな先生でした。水泳の授業で、クジラを連想させる身体でゆっくりとクロールをしてみせ、泳ぎ終わった時にニコリとし、「泳いだ後の笑顔が大事なんだ。これができたら合格!」と言われたことを思い出します。ラグビー部の練習では、怪我したり具合が悪くなった生徒に対し「走れば治る」と言うだけでした。当時は「そうなんだ」と

信じて走っていたから不思議です。

岡崎先生ご夫妻とは、今でも家族ぐるみのお付き合いをさせていただいており、娘たちに魚のさばき方まで教えていただきました。お会いするたびに教師としての自分の器の小ささを思い知らされます。そして教員人生のスタートの場面です。そして教員人生のスタートの場面でつまづいた私を、「再生」させて下さったのが尾川直太郎先生

## わたしの出会った先生 26

# 出会いの中で今の私が・・・

でした。東京都葛飾区立堀切中学校での教員一年目。初めての担任として1年B組を受け持つことになった私は、子どもたちが可愛くて甘やかしてしまい、十分な生活規律を身に付けさせることができないでいました。入学当初、「中学校生活は楽しい」「先生大好き」と喜んでいた子どもたちの生活は乱れ、トラブルが続ぎ、荒れていき

ました。頻発する事件に振り回される非力な担任への生徒の冷ややかなまなざし、生徒の暴言と担任の感情的な指導の応酬……こんな毎日が続き、子どもたちと私の関係は険悪になり悪化の一途をたどりました。生徒を可愛く思う気持は全く失せていました。生徒が夢に出て来てはうなされる、文字通り悪夢のような日々でした。

## 遠藤利美



夏の終わり頃、そんな私を見かねたのか、当時定年直前だった尾川先生が、「遠藤君、最近生徒を叱ってばかりいないかい？ 子どもは良いところを認められて、ほめられて初めて成長するものだよ。生徒をもっとほめてみなさい。」とアドバイスしてくれました

「この子たちのほめるどころ？無理無理……」自問自答の毎日

したが、ある時、教卓から子どもたちの姿をぼんやり見ていると、Aさんが床に落ちていた友だちの筆入れを拾ってあげたのが目に入りました。「おっ？」と思い、「ありがとう。優しいね。」と声を掛けると、Aさんは笑顔を見せました。「認めてほめるってこういうこと？」自分の中で何かが変わりました。その後は、子どもたちの「いなあ」と思える行動がどんどん目に飛び込んでくるようになったのです。教室のゴミ箱に入る子、自分から率先してバケツに水を汲んできてくれる子、元気に返事できる子、欠席の生徒にノートを見せてあげる子……気が付けば教室の中はほめることで溢れていました。

それからは、みるみるうちに子どもたちとの関係も改善していききました。尾川先生の一言は、私にとってその後の楽しく充実した教員人生への大きな分岐点だったのです。

(中山中)

# いう苦しみと喜び

みやぎ教育相談センター  
さとう ゆきこ

## ○「待っていてよかったあ」

この春、喜びの電話がありました。「孫が高校決まりました。本当に嬉しいです。これまで待っていてよかったです。」この三年間、苦しい時嬉しい時、何度も共に悩み苦しみ、時に笑いあったKさんからでした。

声も弾み新しい出発が出来る喜びの声。共に歓声をあげながら、これまでのご苦労を思ったのでした。

## ○Kさんとお孫さんM君

Kさんは、ずっとお孫さんであるM君の側において見守ってきたのです。

Mくんが学校に行けなくなったのは小学校の高学年当たりだったという話でした。その頃から、M君の側においてずっと見守ってきたのは、祖母である彼女でした。

Kさんは農家です。ご家族（M君のご両親）は外に仕事を持っています。家族のだれかに何かがあれば、家にいるKさんに何かにと背負うものが多くなつたと思います。

ましてやお孫さんのことです。気をもまずにはいられなかったでしょう。何かしたい／＼出来ることは何でもしたい／＼と思つては、どれ程心を砕いたでしょう。

## ○「いづも話聞いてくれてねえ」

3年前（M君・中学一年生）の春も終わりかけの頃だったでしょう。Kさんからセンターに電話が入りました。「孫のために何かもつとできないか」「家にいる一人で気に病むばかりで」と。

中学生になったM君、学校へ行けない日が続きました。ご両親も学校への相談や担任との話し合いなど、様々な試みをしたようです。一緒に旅行し励まそうとしたとも聞きました。

そうした中で、日々一緒にいて顔を合せているのは、祖母であるKさんでした。

「毎日朝は起きでくんですく学校へ行こうともするんですくその後どう声かければ良いんだが」と

そんな時は、必ず歩き出す日が来るはず見守るのが良いかもしれないと話し合ったのでした。

「学校へは行けないんだけど、畑を手伝ってくれたんです」と

働くおばあちゃんの姿が心を動かすのではない、M君は動き出しているのかもしれないと二人で気付いたこともありました。

「学校へ車で送ったんです。先生が来て声かけでくれました」と

先生に遠慮せず、学校へ行けた時には安心できる部屋を用意してもらおうなどお



相談センターに通うAさんの切り絵

願いしてはどうかと相談し、待つのは大変なことだと共に涙したりもしました。

「学校へは入れましたく保健室とかねく先生が待つてくれましたり、嬉しいです。」祖母として毎日の登校付き添いは、どんなにか気の重いことだったでしょう。

いつも優しい語り口で周りへの気遣いばかりのKさんでした。センターにさえ「いづも話聞いてくれてねえ／＼ありがたいです。落ち着きます」と話してくれるのです。

私たちも、Kさんと一緒に悩み考えていきたいことや、センターも力をいただいていることを伝えたりしました。

○親はもつと苦しいがもしれないけど  
M君を待つ・見守るKさんの姿を、家族は時に「もつと違うやり方があるんじゃないか? 優しくすぎるんじゃないか?」と思うこともあったそうです。

そこでKさんは苦しむのです。それこそ毎日、側にいる者は模索の日々です。出来ること何かと悩み、大きく前進するような手だては見つからず。そこを分かり合えない日もあったのです。

## ○友達・学校 つながり絶やさず

Kさんは、学校やM君の友達との繋がりを大事にしました。

朝学校で迎えてくれる先生の中には、「『苦勞様』」の一言を返せないこともあ

るでしょう。そんな時Kさんは傷付くこともあると話してくれました。それでも先生方へ気持ちを伝え、更に「M君の居場所づくり」を願い、日々の学習について担任と話し合い、積み重ねていったのです。

また、M君の友達が自宅にきてくれることを大切にしました。時には自宅で遅くまで話し込む少年達を、喜んで見守っていたのです。

そうした繋がりがM君の背中を支え押してもくれると信じたのでしよう。

## ○時々電話

「愚痴りだい時あんです」

そうした日々を重ね、Kさんからの連絡が少なくなりました。農家の仕事も忙

しいだろうかと、きつと学校へ行き始めたのではないかと、思っていました。

M君は学年がすすんで、学校で過ごし学習し、進学準備を始めたようでした。

Kさんからは「学校に行ってるんですよ」電話が入り、「良く辛抱強く待ちましたね」側にいる者の辛さ、大変でしたね。Kさんが側で見守って来たからこそです。」と少し笑い合いました。

M君が落ち着いている時にも、Kさんはふと声を聞かせてくれます。「時には愚痴りたい時あんです」と少しおしゃべりします。

そして、この春の高校進学の知らせ。Kさん本当にお疲れ様でした。



相談センターに通うAさんの切り絵

## 「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

### 相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・  
家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき9時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。



### おすすめ映画

韓国映画

## 「金子文子と朴烈」と「主戦場」

パクヨル

ドキュメンタリー映画



1923年の東京。社会主義者の集うおでん屋で働く金子文子は朴烈の詩「犬ころ」に出会う。二人は同志となり、仲間たちと「不逞社」を結成する。

そして9月1日、関東大震災の発生。日本政府は大震災による混乱に乗じて、ある意図のもとに朝鮮人や社会主義者らを無差別に総検束する。臨場感あふれる閑議が初めて描き出される。獄中の二人は国家権力と闘うことを決意。その闘いは朝鮮にも広まり、多くの支持者を得る。二人はえん罪であり、「皇太子（後の昭和天皇）暗殺」の容疑など大逆罪で死刑を宣告される。弁護人は布施辰治、国家を根底から揺るがす歴史的な裁判に二人は朝鮮の服装で出廷する。

二人は取り調べも裁判も獄中生活もエネルギーに快活にふるまう。初めて知る金子文子と朴烈だ。魅力的な主人公を演じた韓国の女優は、「国籍は重要でない。国籍を超えて権力と闘った文子と同志たちに注目してほしい」と望む。韓国でも金子文子の再発見という。現代の日本人にとっては大正の「歴史と人間」の新発見だ。権力と闘う女性思想家を描く。

映画「主戦場」とは何か。この映画は「従軍慰安婦」論争の主戦場へ観客を2時間釘付けにする。監督は35歳の日系アメリカ人。慰安婦被害を認める支援派と「歴史修正主義者」と言われる否定派とのバトルグラウンドだ。有名な論客や初めて知る論客が30人近く登場する。カメラは論客の声と表情に冷静に対処し、あいだに多くの歴史的なニュース映像などを挿入して論争の本質に迫る。

速いテンポで進む論争は、教科書問題、女性への性虐待、NHKへの政府介入問題、神社本庁、日本会議など切り口を広げていく。裁判劇のようだが、封印された論争というが、映画はアメリカにおける慰安婦像設置論争の「主戦場」を何度も追う。映画の最後に重要な証言者が立つ。櫻井よしこの後継者とも期待されたというナシヨナリストであった女性の告白だ。和太鼓の音楽が論争の原点を見つめ直すことを促す。「主戦場」は観客の中に入り込む。

(長住 康博)

## センターの動き

### 4月

1日 4月から宮教大に着任した沼倉さん来室

5日 運営委員小委員会での人事案件に係わる会館側からの報告内容を確認し、今後の対応など協議

9日 永澤さん来室。故・一戸富士雄さんの『教育文化』『カマラード』掲載の論文・記事を閲覧、コピーしていく。事務局会、つうしん94号発送

12日 岩川直樹さんと教育講演会の演題と内容を確認。第1回事務局会つうしん94号発送作業。

16日 市民の会事務局会、仙台市いじめ防止基本方針や学校統廃合などへの取り組みについて話し合う

22日 新採教師からつうしん読者になるとFAX入る。ゼミナルsideデュルクームの道德教育論2回目

24日 「1年生めんこいゼミ」チラシ作成。デュルクーム報告作成

26日 第2回事務局会 第1回運営委員特別委員会でのセンターのこれからを議論

27日 午前「教育」を読む会。午後：宮城の会・世取山講演会。夜：県内大学研究者との交流会

### 5月

8日 市民の会事務局会  
9日 市民の会・市教委と「いじめ防止条例」に係わる話し合い

10日 第3回事務局会、今年度の活動内容について協議  
11日 岩川直樹・春の教育講演会。内容が良かっただけに参加者が少なかったのがもったいない

17日 仙台市教育委員会・適正化推進室と西部地区の学校統廃合について懇談

20日 哲学side・ジネットの学校教育論・参加10名。運営委員会開催案内発送

22日 第1回1年生めんこいゼミ。夜の開催にもかかわらず14名参加。新卒を含め若い教師多数。明るい展望が見えてきた

24日 第4回事務局会  
25日 「教育」を読む会  
26日 道德と教育を考える会  
28日 「こころ講座」世話人会。今年度の基本方針を話し合う

31日 運営委員会出席確認の電話入れ。鈴木道太関連の書籍発刊を企画している埼玉の明誠書林の細田さん来室。春日・菅井と懇談

6月  
1日 県教組定期大会傍聴参加。運営委員会要項準備

4日 第1回運営委員会。夜、道德なやんでるたるる

8日 教育のつどい実行委員会  
9日 民研評議会（東京）菅井参加

10日 教育会館理事長・理事へ要請書を届ける  
11日 教育会館理事会、センター事業について報告。午

後、市民の会事務局会  
13日 第2回こころ講座世話人会。武庫川大学の山田さんより被災地の聴き取り調査について相談電話が入る

14日 第5回事務局会  
15日 民教連代表者会  
16日 県南教育シンポジウム。菅井報告

17日 哲学side。シユタイナーの教育思想を考える1回目  
19日 道德なやんでるたるる

26日 第2回1年生めんこいゼミ。夜の学習会にもかかわらず参加多い  
28日 第6回事務局会  
29日 午前中、「教育」を読む会。初参加3名を交え10名で大盛況。午後「国語なやんでるたるる」特別編は「大造じいさん」とがん

3名。の授業報告と授業づくりを考える。教材文から新たな発見多く面白かった

7月  
1日 つうしん原稿、ほぼ集まり、きた出版へ送る。残り2本  
3日 つうしん初稿と最後の原稿を北村さんに渡す。夜、早々に2校が届く

4日 つうしん校正作業。  
7日 道德と教育を考える会、中学校教科書の分析を行う

8日 哲学side、シユタイナーの教育思想を考える2回目  
10日 第3回1年生めんこいゼミ

菅井